



2025. 3. 24

第107号

〒107-0062 東京都港区南青山4-18-21 南青山スカイハイツ504号 共同映画(株)内 03-6427-4425 FAX03-6434-7040

この会は、故人を納骨・合葬し、墓碑銘にその名を刻銘して、顕彰し、末永く共同して追悼します
 この会は、生前予約者を会員として、会員の意思によって運営され、総会で選ばれた理事会が、日常の運営に当たります
 この会は、思想・信教の自由を尊重し、宗教・宗派の有無を問わず、映画を愛し、平和と民主主義・人間の尊厳を守ります

ホームページアドレス <https://bohinokai.or.jp/> Eメールアドレス bohinokai@gmail.com

第34回全合葬者・合同追悼会

4月29日 多聞寺にて開催します。

「映画人の墓碑の会」は、恒例の全合葬者・合同追悼会（略称追悼会）を4月29日、墨田区多聞寺にて執り行います。

追悼会は、2024年3月から2025年2月末までにお亡くなりになった19名の方々の追悼・埋葬ともに全合葬者の合同追悼会として執り行う法要です。

「映画人の墓碑の会」は、映画を愛し、平和と民主主義を支え人間の尊厳を守った人々を顕彰・追悼し、映画人の墓碑に刻銘致します。

今年、戦後80年という節目になりますが、内外の情勢は、至る所で紛争がたえない状況になっています。その中で、日本政府は、平和への希求をすることなく軍備拡大という嘆かわしい道に進んでいます。しかも世界の反核活動が進展し、被団協が、ノーベル平和賞を受賞するという画期的な年のなか『核兵器禁止条約締結国会議』へのオブザーバー出席さえ拒むという世界の流れに逆行しています。「映画人の墓碑の会」は、今後とも平和な社会の実現を願いつつ今年の全合葬者・合同追悼会を行いたいと思います。

今回の全合葬者・合同追悼会にて、埋葬・刻銘されます方々のご遺族をはじめ会員の皆様のご参加をお願い致します。当日の要綱は次ページを参照してください。

頁	主な目次	多聞寺・その他の行事
2	2025年全合葬者・合同追悼会 式次第	○花まつり人形劇
4	第34回新合葬者紹介	4月5日(土) 11時
6	新合葬者との思い出 藤野戸護／森住卓／山本洋子	○大施餓鬼会
9	新入会紹介	5月1日(木) 11時
10	会務報告	○お盆供養
11	堀内正美さんの社会活動	7月12日(土) 11時・15時
12	七福神めぐり	井上優子／堀田敏子
14	映画紹介	平沢清一
16	編集後記／事務局よりお願い	8月13日(水) 11時

○当番・11時～13時・月（平沢・松本・山口逸）水（千蔵）金（山口百）

2025年 全合葬者・合同追悼会 式次第

- 1、受付開始 11時15分
 - 2、全員合唱 11時45分
 - 3、山口代表理事挨拶 12時
 - 4、岸田住職来場
 - 5、読経
 - 6、ご遺族に続いて一般参加者のお焼香
 - 7、住職の法話
 - 8、合葬者の紹介と写真撮影 13時
 - 9、埋葬式への移動 13時30分
- 岸田副住職の読経と埋葬 献花
埋葬の順序は担当より説明します。
埋葬が済み次第、家族ごとの写真を山門前にて撮ります。

山門近くで全員合唱と閉会式 14時30分終了予定

全合葬者・合同追悼会 当日のお願い

今年も昨年同様、参加者の制限なく出席できることとなります。但し、本堂内は70名程度となりますので、参加希望者はできるだけ早く申し込みをお願い申し上げます。参加人数が多い場合庭園にてお待ち頂くこととなります。



第34回新合葬者19名は次の方々です。

森谷澄子さん	2023年12月9日没	享年97歳
宮古とく子さん	2024年2月28日没	享年100歳
大隅夫美雄さん	2024年3月31日没	享年82歳
飯塚喜久江さん	2024年4月4日没	享年71歳
徳永淳子さん	2024年4月17日没	享年97歳
阿部美津子さん	2024年4月または5月没	享年92歳
堀 恒之さん	2024年5月6日没	享年89歳
高橋芳男さん	2024年5月25日没	享年90歳
吉田順平さん	2024年7月6日没	享年91歳
押見信二さん	2024年8月4日没	享年68歳
平岩道夫さん	2024年8月6日没	享年89歳
白井 忠さん	2024年10月11日没	享年85歳
野口信子さん	2024年11月18日没	享年95歳
長井 博さん	2024年11月26日没	享年94歳
野田耕造さん	2024年12月11日没	享年80歳
西口武郎さん	2025年1月7日没	享年90歳
深井耀子さん	2025年1月27日没	享年84歳
井口省司さん	2025年2月4日没	享年91歳
田口義明さん	2025年2月27日没	享年81歳

略 歴

森谷 澄子さん



1926年9月30日、川崎市に生まれる。46年東京女子経済専門学校を卒業、東京工芸大学科学史研究室内「技術文化」編集部勤務。49年婦人民主新聞記者となる。51年、森谷玄と結婚。54年、浦和保健所の地域保健団体「母と子の会」を設立、会長となる。61年、浦和母親連絡会会長。71年から85年まで岩崎学術出版社勤務。

宮古とく子さん



1924年12月1日、東京に生まれる。53年、(株)新生映画社に就職、『太陽のない街』製作に参加した後、53年、山本薩夫プロダクション設立に参加、『赤い陣羽織』『人間の壁』『ドレイ工場』『戦争と人間』三部作『青春の門』『あゝ、野麦峠』等の企画製作に参加。83年、山本監督死亡により退社。98年、群馬県みなかみ町に移住、地域の婦人民主クラブで映画会を催していた。

1942年2月22日、神奈川県横浜に生まれる。60年、神奈川県立商工高等学校卒業、(株)日本金属工業川崎工場に入社。65年、(株)TCJ 映画センターに入社、『鉄人28号』の仕事に従事。翌年、映画放送産業労働組合に入社。69年、(株)エイケンに入社、テレビアニメ『サザエさん』の原画作成に従事。23年より白血病で入院治療していた

飯塚紀久江さん

1952年9月23日、埼玉県上里に生まれ。国鉄労働組合員の飯塚頼夫と結婚。75年、浦和市栄和小学校の教員となり、日教組に加盟。02年、退職。

徳永 淳子さん

1943年、京都橘女子学園を卒業。44年、父の満映転勤に伴い、経理担当として満映へ。46年、中国人民解放軍に入隊、野戦病院の看護婦となる。50年、除隊後、長春映画制作所に配属され経理を担当。53年、上海科学教育映画制作所でスクリプターとなる。戦後に帰国、日中文化交流、残留孤児調査の通訳、中国映画の字幕翻訳でも活躍。72年から和光大、東大、東京女子大などで中国語講師。定年退職後は日中友好協会の副会長を務める。

阿部美津子さん

1931年6月15日、江東区亀戸で生まれる。NTTに在職中は演劇サークルに参加。56年、独立プロ関係の映画製作に携わっていた阿部三郎と結婚。78年、夫と死別。88年、NTTを退社。

堀 恒之さん

1934年11月3日、福島県梁川に生まれる。52年、福島県立梁川高校を卒業。52年、㈱ゼブラ自転車に入社。62年、信子と結婚。75年、自転車卸売業を開始。02年、メンズ洋服の(有)マンハッタンの役員となる。石黒計三氏の義弟。

高橋 芳男さん

1933年11月7日、名古屋市中区に生まれる。52年、兵庫県立加古川東高校を卒業、教員を目指し神戸大学教育学部国語科に入学したが志が変わり中退、日本共産党へ。62年、上京して赤旗新聞文化部記者となり、映画担当として広く映画人と接した。退職後に運転免許取得、さまざまな地域活動、水泳、テニス、囲碁を始める。

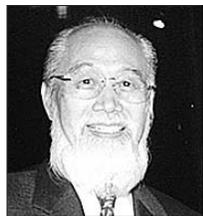
吉田 順平さん

1932年8月17日、樺太で生まれる。48年に引き上げ、自動車修理、薬局店員などに従事。59年、共同映画に入社、労組委員長、日本映画復興会議幹事などを務める。75年、習志野市議会議員に当選、28年の議員生活。映画人の墓碑の会には設立準備から参加、31年間専務理事として社団法人化にも尽力。22年より複数の症状で入院を繰り返していた。

押見 信二さん

1956年7月22日、宮城県栗原市に生まれる。80年、慶応大学英文科卒業後、日活に入社。名古屋、宇都宮にて劇場勤務。83年、郡山日活支配人に。85年、日活メディア事業本部・開発部転籍、3D、衛星事業等に関わる。95年、東北新社に転職、衛星メディア部に所属。09年部長に、その後、囲碁将棋チャンネル運営に関わり、12年より同放送センター運行部長を経て定年退職。

平岩 道夫さん



1934年11月20日、名古屋市に生まれる。69年、明治大学文学部を卒業、平凡出版に入社。「月刊平凡」「週刊平凡」「平凡パンチ」の記者として俳優・歌手を取材。74年、フリージャーナリストとなり海外旅行評論家として航空会社・政府観光局に招かれ海外取材を行う。04年ケニア観光親善大使に任命され、写真展開催、講演会、テレビラジオ出演で活動する。05年、自宅近くに「平岩ポレポレギャラリー」を開設。

白井 忠さん

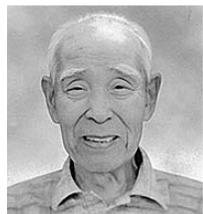
1941年12月2日、東京都目黒区に生まれる。大阪大学法学部卒業、同大学院修了。住友重機械工業広報課長、セコム広報室部長を経て、88年より住友グループの制作プロダクションSNBCで経営と製作に携わり、(株)SNBCの代表取締役社長となる。科学技術映画祭、産業映画コンクール、国際産業映画祭、イタリヤ海洋映画祭などで受賞。写真嫌いで葬式の写真も無い。

野口 信子さん



1929年7月15日生まれ。41年、埼玉県久喜高等女学校を卒業。46年、日本橋高島屋に勤務。55年、野口茂と結婚して退社。68年、夫が設立した設計事務所に勤務。83年、閉所して退社。

長井 博さん



1930年4月20日、神奈川県平塚市に生まれる。56年、東映教育映画部で堀内甲監督『オルガン物語』の助監督見習いとなり、近代映画協会で新藤兼人監督『女優』の助監督となる。64年、近代映協の同人となり、演出・脚本に従事。

野田 耕造さん



1944年3月7日、東京都大田区に生まれる。68年、一橋大学を卒業、日本技術映画(現鹿島ビジョン)と契約。69年、日本電波ニュース社員となり、演出、プロデューサー、制作部部長を務める。退職後、日本記録映画作家協会事務局長として活動。「被爆者の声をうけつぐ映画祭」実行委員会に参加。24年、再度の脳出血で意識不明となる。

西口 武郎さん



1935年、三重県松阪市に生まれる。53年三重県立宇治山田高校を卒業、東京映画写真学校に学び、54年、日活に入社、神田日活劇場に勤務。法政大学二部にて映画サークル活動を行う。日活撮影所試写室転勤後、日活労働執行委員として組合活動を行う。71年、日活児童映画に転職、親子映画運動と出会う。80年代、モスクワ・タシケント映画祭に出席。児童映画では『先生のおうしんぼ』、アニメ映画『北極のムーシカミィシカ』、今井正監督『ゆき』等、多くの作品の企画・普及に取り組む。84年、東京フィルムを設立、88年、日ソ最初の合作アニメ『小さなペンギン・ロの冒険』を完成させる。趣味は映画資料の



深井 耀子さん

コレクションと音楽。阪神タイガースの大ファンだった。

1940年3月20日、仙台市で生まれる。63年、上智大学文学部を卒業。75年、東京大学大学院教育学部研究科単位取得満期終了。95年、椛山女学園大学短大部に就職。02年、同大学文化情報学部に移動。退職後、京都精華大学絵本部で78歳まで働く。日本図書館研究会理事となり、多くの本を出版。



井口 省司さん

1934年1月22日、東京都池袋で生まれる。49年和光学園中学校を卒業、世田谷の松坂製パン所に就職。数年の病院生活の後、東京芸芸大学音楽科に入学、61年に卒業、八丈島中之郷小学校に勤務。70年、小平市の、73年、八王子市の親子映画運動に参加。94年、八王子市立中野北小を退職。当会の理事を長く務め、アコーディオン演奏で会を盛り上げてくれた。



田口 義明さん

1943年12月12日、川崎市に生まれる。90年ブランドス株式会社社長就任。東映、松竹の代理店としてテレビ番組を販売。近代映画協会その他の独立プロ作品をNHK等に販売。05年退社、旅行、ゴルフを楽しむ。

吉田順平さんの思い出

共同映画代表・映画人の墓碑の会幹事 藤野戸 護

私は1969年に共同映画に入社、その時点では吉田さんは西島勝太郎さんのもとで経理の責任者として共同映画の屋台骨を支えていました。後に知ったことですが、彼は樺太で生まれ、引揚げ後に映画界には、岡山県で作られた記録映画「月の輪古墳」に関わり、そのなかで製作者の一人であった坂斎小一郎氏に誘われて共同映画に入社した。そして労働組合で活躍し、山本薩夫、今井正らが発足させた日本映画復興会議の活動を支えていました。一方「樺太からの引き上げ問題」を後に北海道共同映画の代表永谷氏と一緒に取り組んでもいた。もうひとつ、奥様の久子様は野々村寛止氏の息女で、野々村氏が私の父と同じ政治結社の人で別の意味で順平さんと親しくお話をさせていただきました。

当時、共同映画は劇映画「沖繩」配給普及を中心に仕事をしていった。しかし、それは配給としては非常に厳しい条件での業務であった。製作では沖繩の米民政府から関係者にビザが発給されず、徳之島と沖繩本島の両方で制作し、大きな制作費増加が生じて、よみうりホールでの上映では最終的に14万2000人を動員し、大きな成果を生んだにもかかわらず、収支として制作費の分担金が大きく、赤字を生んでいました。また、その後、配給を委託されたドキュメント「鬼剣舞」も制作から関わっていたのですが、製作陣の思い入れが強く、大変わかりにくい作品に仕上がりが、上映は失敗に終わってしまった。資金繰りが大変になり、その対策に奔走をしていたのが彼であった。共同映画がこのとき2回目の経営危機を迎え、再建のために、経営の再構築を債権者、

労働組合、社員から要求され、その一端を担う吉田氏も責任をとる形で共同映画を去ることになった。

その後、東銀座印刷に籍を置くが、居住地の千葉県習志野市の共産党の要請で市議会議員に立候補し、7期議員を務め、また地区委員会の重責担うことになりました。その活動は議員活動と毎日のように共産党の機関紙である「赤旗」を配達するという大変な活動をこなしていました。時には自転車での配達折、転倒して、怪我をすることも多々ありましたが、彼の不屈の精神はそんなことをモノともせず継続をしていました。

共同映画の創設者である坂齋小一郎が亡くなり、未亡人のハツさんから、元社長代行を務め、共産党の国会議員金子満広氏の秘書であった山口義夫氏へ遺産の一部を何かに使ってほしいという委託寄贈があり、そのなかで、独立プロの仲間が亡くなっても埋葬するお墓がないことに心を痛めていた人たちが共同のお墓を作ろうと墨田区にある多聞寺の住職岸田氏へ相談、境内の一角に碑を作ることが認められた。それでその碑をどのように運営するか組織作りが提唱され、共同映画、独立プロ関係の方々が集まり「映画人の墓碑の会」が生まれました、その一員に吉田順平氏も加わっていました。当初、この会の財政管理者として西島勝太郎氏が携わっていましたが、彼が亡くなり、その後を吉田氏が継承してくださっていました。その間に任意組織であった会を一般社団法人「映画人の墓碑の会」へ変更、そしてその財政管理を専務理事として吉田氏が重責を担ってきました。しかし近年地域での活動で怪我や病気をされることが多くなり、専務理事を辞任して自宅療養をされていましたが2024年7月6日力尽き、永眠されました。合掌…。

野田耕造さんとの出会い

日本写真家協会・日本ビジュアルジャーナリスト協会 森住 卓

野田さんとの出会いは1980年代後半、米軍艦載機夜間訓練場計画が持ち上がった伊豆七島の三宅島でした。火山島の三宅島はほぼ20年ごとに噴火を繰り返していました。1983年10月10日の噴火で島の南西部の阿古集落が溶岩で埋まり、大きな被害を受けました。その年の暮れも押し迫った村議会会で突然、米空母艦載機の離発着訓練場の誘致が決議されました。ニュースは島中を駆け巡り、島に5つある集落ごとに選出されていた村会議員たちは「相談もなしになんで決めたんだ？」と住民の激しいつるし上げに会い、その場で撤回をしました。日米安保と真っ向から対決する「しまいくさ」が始まりました。

私は噴火以後、「南の孤島」で起こっていることを全国に知らせたいと島の人びとの取材を続けていました。1986年2月の自民党国防部の議員たちが島を訪問し、それに島民たちは激しく抗議しました。その時に出会ったのが日本電波ニュース社の野田さんでした。

その後も島に通う東海汽船のストレッチャア丸で何度かお会いし、島のことや自分の仕事のことなどを話し合いました。いつも私の話をじっくり聞いてくれ、励ましてくれる人でした。セスナをチャーターして空撮をする、後部座席が空いているから一緒に行かないかと誘っていた。フリーの貧乏写真家をいつも優しく応援していただいた。

通い続けた三宅島の作品「ドキュメント三宅島」（亀井淳さんとの共著）は大月書店から発刊され、野田さんが作った同名の映

画（星山圭監督）が同じ年に完成しました。私の著書は日本ジャーナリスト会議奨励賞、野田さんの映画は映画復興会議奨励賞を受賞しました。

三宅島からの帰りの船では、夕陽が沈む太平洋を見ながら船内のレストランでホットケーキをいつも注文されていました。ある時、なんで野田さんは取材中にメモを取らないの？と質問したことがありました。「メモを取ると一番印象に残っていることを忘れちゃうんだよ。自分が一番印象に残っていることが一番大事なことなんだ」と仰った。その意味を今も考えています。合掌

宮古とく子さんを偲ぶ

映画監督 山本洋子

私が初めて宮古さんにあったのは50年以上前になる。その頃は、夫、駿の父、山本薩夫監督のプロデューサーとして、確固たる地位をしめていたし、よく家にも来ていた。まだまだ、映画の世界に女性がほとんどいない時代から（メイク、結髪さんを除いて）プロデューサーと言う大変な重責を担って歩んできた重さはすごいものだったのだろうが、我が家で集う時にはそんな事を感じさせず、みんなと一緒に映画話に花を咲かせていた。

始まりは独立プロの時代。お金の工面が大変だったらしい。作品第一と心に決め、意に染まぬ高利貸とのやり取りの顛末は何十年経ても憎しみと怒りが消えていなかった。それもある種のパネになったのかもしれない。そんな時代を経て、やがて企業での作品も手掛けるようになったが、山本監督が逝去した後はきっぱりと潔く辞めた。監督の御弟子さんたちが懇願しても頑として断わっていた。

2015年「薩チャン正ちゃん」の撮影で、水上を訪れた。記憶の良さは抜群だった。面白かったのは、佐野浅夫がてっぱっていた（撮影がダブっている）時、朝早く自宅に押し掛け、さっさと自分の現場に連れて来てしまったという。「そうでもしなきゃ、こっちの撮影遅れちゃうんだから」と話す口ぶりからは、相手を出し抜いても、映画を完成させる、監督の意向を組むという熱気が、映画愛が、何十年経っても宮古さんの体内からほとばしっていた。

残念なのは、その情熱で若いプロデューサーを育てなかったことと思う。独立プロ時代は、若い人を育てる余裕もなかっただろうし、企業には、企業のやり方があっただろうが、映画についての執念と、この時代どんな映画を創るべきかの深い見識のある宮古さんのようなプロデューサーの姿を見たかったと思う。もっと、話を聞いておけばよかったと思う。映画の大先輩として。あちらの世界では、山本監督たちとお酒を酌み交わしながら、映画談義で口角泡を飛ばしていることでしょう。



新入会員紹介

片岡 富枝 1944年11月2日、千葉県松戸市に生まれる。

63年、江戸川女子高校を卒業。67年、舞台芸術学院講習科を卒業、劇団薔薇座に入団。78年、プロダクション中央の創立メンバーとなる。85年、81プロデュースに所属。91年、劇団青年座に入団。各養成所の講師を務める。68年の「海拔3200米」が初舞台。以後、舞台、映画、テレビドラマ、アニメ、吹き替え等に出演。18年、第12回声優アワード功労賞受賞。10年、日本俳優連合常務理事（財務委員長）となる。

高橋千津子 1948年3月17日、千葉県保田に生まれる。

63年、駒沢学園女子高校商業科を卒業。68年、国際放映にスクリプターとして契約。以降、東映映画、東映テレビプロ、松竹、大映、日活、東京映画宣弘社、歌舞伎プロでテレビ番組、映画制作に従事。82年より東映教育映画にて児童教育映画、社会教育映画の脚本を執筆。90年、「この愛をありがとう」が文部省特選、監督となる。94年、すぎのこ文化振興財団専属として人形劇の脚本、演出を担当。03年まで同財団の常任理事、事務局長を務める。07年、川口学園・早稲田速記医療福祉専門学校介護福祉科を卒業。09年から現在まで社会福祉法人「こころの家族」で活動。

平岩 道夫 新合葬者紹介ページを参照（没後入会）

平岩寿美代 1938年3月1日、東京都台東区に生まれる。

錦州高校を卒業後、姉中村雅子の付き人として撮影所に通う。58年、取材が縁で平岩道夫と結婚、「テレビ結婚式」（TBS）に出演。60年、長女・雅代を、74年、次女・道代を出産。家族揃って温泉旅行、海外旅行を楽しむ。

平岩 雅代 1960年7月25日、東京都新宿区に生まれる。

81年、目白学園女子短大英語英文科を卒業、平岩道夫事務所で父の秘書として活動（写真、執筆、講演、出版、海外旅行ツアーの添乗、テレビ・ラジオ番組出演）。04年、父と共にケニア観光親善大使に任命される。茶道速水流教授。英語検定2級。

平岩 道代 1974年7月25日、東京都杉並区に生まれる。

92年、新宿の堀野書道専門学校を卒業、日本書道師範会指導者連盟より書道教授認定される。同年、杉並区内の手話サークルに所属、手話を学習し、手話普及活動、手話通訳活動を継続中。

山口 洋 1970年5月30日、東京都杉並区に生まれる。

92年、都築育英学園、東京工業専門学校航空工学科を卒業、日本航空機株式会社に入社。中学の頃からアニメ好きで、現在もアニメグループを作り楽しんでいる。父は山口逸郎氏。

児玉 高志 1951年4月7日、東京都中野区に生まれる。



75年、千葉大学人文学部を卒業、日活株式会社に入社。82年『受験慰安婦』で監督デビュー。84年、株式会社につかつを退社。87年、株式会社フィルム・シティに所属。02年、東京工芸大学芸術学部映像学科教授に就任。17年に定年退職。父は映画評論家児玉数夫。

児玉 裕美

1958年2月1日、神奈川県真鶴町に生まれる。80年、立教大学文学部を卒業。熱海にある(株)旅館経営研究所に勤務。83年、児玉高志と結婚



押見 信二 新合葬者紹介ページを参照(没後入会)

会務報告

2024年11月9日(土)第14期社員総会を開催し、以後、年末・年始に向けての諸活動を開始いたしました。

総会後、第1回理事会にて第15期の予定を確認し、最初に「七ふく106号」の編集を進め、12月23日に全会員への発送を行いました。しかし、残念なことに発送を依頼した佐川急便の作業が滞り、年内配達がされていないことがわかりました。様々な追及をしましたが、結果は、年明けの1月13日前後に届けられるということになりました。

原因は、郵便局への発送依頼をした佐川急便の配達物処理過程でのミスが起きたことがわかりました。人手不足などという昨今の現実がこのようなかたちで現れたようです。

「墓碑の会」としては、初めての経験です。お詫び申しあげます。

さて、総会後の会務報告は、次の日程通り行いましたが要点のみ報告させて頂きます。



第2回理事会

尚15期の役員体制は、2025年10月でとっており、前年同様の体制にて行っています。引き続きご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

会務日誌と概要

2024年

11月9日 社員総会 青山生涯学習館

11月18日 「七ふく106号」編集会議

11月26日 「七ふく106号」編集会議

12月3日 事務局会議

第1回理事会 総会総括と今後の方針・予定

12月9日 「七ふく106号」編集会議

12月16日 印刷所へ原稿送る。

12月23日 事務局会議

「七ふく106号」袋詰めと発送。終了後、納会
年末27日段階で「七ふく」未配達発覚する。

2025年

1月3日 「隅田七福神巡り」12名参加。(墓碑の会8名 下町の会4名)

1月8日 事務所オープン 当番スタート(千蔵理事)

1月10日 新年会 「七ふく106号」配達開始

1月31日 事務局会議 日程確認と諸問題について検討

2月3日 「七ふく107号」編集会議

2月21日 北烏山住宅 建て替えに関する個別説明会

2月26日 事務局会議 追悼会の段取りと理事会準備

3月4日 第2回理事会 4月29日全合葬者・合同追悼会の準備等

堀内正美さんの社会活動

平沢清一

NHK朝ドラ『おむすび』に、神戸の町中華店主役で出演中の当会名誉会長である堀内正美さん。阪神・淡路大震災から30年目の関連報道で、NHKや朝日新聞など主要マスコミをはじめ多くのメディアが堀内さんに注目しました。

1984年に東京から転居して神戸で被災した堀内さんは、市民ボランティア団体を結成し、被災者の生活再建などの支援に尽力されてきました。神戸市民の合言葉となった「がんばろう!!神戸」の提唱者といわれています。神戸の経験や教訓を生かそうと、全国各地の被災地に赴いて被災者に寄り添った支援にも取り組んでいます。

堀内さんは、喪失感から悲嘆にくれる人々が希望を抱くためには何が必要なのかを問いかけ、今後の被災地支援に役立つ記録を残したいとの思いで、昨年『喪失、悲嘆、希望 阪神淡路大震災その先に』を出版しました。遺族に寄り添い、行政の手が届かないところへも支援を届けようと奔走した経験が綴られ、男の子を助けられなかった凄絶な体験も明かされています。

震災から生まれた支え合う心を、事故や事件で大切な人を亡くした人々へも広げるNPO法人「阪神淡路大震災1・17希望の灯り(HANDS)」も堀内さんが設立。震災支援で果たしている堀内さんの役割の大きさを改めて知る機会となりました。

七福神めぐり

下町路地とスカイツリーの景色がよかった

井上優子（入会予定）

七福神めぐりに親子で初めて参加しました。大変賑やかで多聞寺をスタートする時、笛と太鼓の鳴り物入り踊りがあり、正月の雰囲気を感じながらの出発でした。後で調べましたら浅草雑技団の春駒踊りでした。多聞寺には、毘沙門天が安置されています。都心ではあまり見慣れない隅田区の下町路地を歩き最初についたのは白髭神社（寿老人）でした。若い人たちの多いのに驚きました。

ここは縁結びの神様だったんですね。一緒に行った娘も早速お参りし、「おみくじ」やら「お守り」など買っていました。そこから直ぐ近くの百花園（福祿壽尊）に着き、ちょっと一休み。甘酒を飲みながらおしゃべり。

その後、鳩の街商店街という下町映画に出てきそうな商店街を抜けると、長命寺（弁財天）弘福寺（布袋尊）最後は三囲神社（大黒神・恵比寿神）と次々と回りました。

途中、スカイツリーが下町の路地の角度によっていろんな雰囲気を醸し出しても大きく見えて感動しました。長命寺には松尾芭蕉、正岡子規等の石碑のあるのも感激でした。そばにある桜餅を買って食べ、言問い団子もおみやげに買ってきました。最後の四囲神社で集合写真をとって解散しました。今回、初めての参加でしたが、墓碑の会がこのような行事をしていることと下町人間の会というのを知りました。

貴重なお正月を過ごすことが出来ました。

七福神巡り・あれやこれや

堀田敏子

昨年の1月3日の隅田川七福神巡りに、初めて参加させて頂きました。今年も参加させて頂き、集合場所の多聞寺に着くと、もう参加される方々や浅草雑芸団の方々がいらっしやる。私は映画人墓碑に行き、堀田と私がお世話になった下町人間の会の山口義夫さん、渋谷昶子監督の刻銘されている碑のところでした。たずみ、お二人を偲び、お参りしました。

ところで映画人墓碑の会は『（略）宗教・宗派を問わず、映画を愛し、平和と民主主義・人間の尊厳を守ります。』と、入会のご案内しおりに書かれています。

実は、私はプロテスタントのクリスチャンで、クリスチャンになるきっかけは、母がクリスチャンであったことと、たまたま聖公会の歴史を訪ねる旅に誘われて、イギリスのカンタベリーの大聖堂での礼拝、イタリアのバチカンではローマ法王パウロ二世の礼拝を守る旅に参加したことに始まります。パウロ二世は、礼拝の後に信者たちの前に立たれ、80歳以上の信者一人一人に、言葉をかけて、ハグをなされた。そのハグを受けた80歳過ぎの女性が、私に「いい旅をしますか？」と声を掛けられた。私は快適な旅と母がクリスチャンであることをお話すると「お母さまは、毎日あなたのことを祈りしていらっしやるわよ」と、付け加えられた。母が私のことを祈っている！それも毎日!? 私は、母に確かめたくてたまらなかった。帰国後、開口一番母に尋ねた。「今更、何を言っているの？あなたの事を、毎日お祈りしているわよ！」と！このことがきっかけで洗礼を受けたのだった。



さて七福神巡りの最初の毘沙門天の多聞寺では、多神教と一神教のキリスト教について思いを馳せながら、次の白鬚神社へ向かった。それから、福祿寿の百花園、弁財天の長命寺。長命寺には芭蕉の句碑『いざさらば 雪見にころぶ所まで』があり、この芭蕉の俳句は『思い立って、さあ転ぶところまで、雪を見に行こう』と詠まれたものだ。また、長命寺近くには、有名な桜餅の山本やがあり、10時頃から歩いている身には、休憩がてらの桜餅は、ほんとうに美味しい。

布袋尊の弘福寺へ向かう。昨年は気が付かなかったが、東向島に誕生した、木の美ナナちゃんが奉納した樽酒天鷹を皆さんに振る舞っている。私も、美味しく頂戴しました。

『シンペイ 歌こそすべて』(神山征二郎監督)

平沢清一

当会会員の神山征二郎監督の新作『シンペイ 歌こそすべて』が公開中です。映画の主人公は、中村橋之助演じる中山晋平(1887年〜1952年)。今も親しまれ歌い継がれる、数多の名曲を生み出した稀代の音楽家の生涯と人間像を紐解いています。

信州から上京した晋平は、劇作家の島村抱月(緒形直人)の書を務めながら、東京音楽学校(現・東京藝術大学音楽学部)で学びます。ピアノが苦手に進級が危ぶれますが、晋平の才能を評価する教師の助けもあり、無事卒業。抱月の「芸術は大衆の支持を離れてはならない」との教えに共感し、平易で分かりやすい曲作りを心掛けます。抱月の主宰する芸術座の舞台「復活」の劇



©「シンペイ」製作委員会2024

中歌作曲に起用された晋平。女優の松井須磨子(吉本美憂)が歌う「カチューシャの唄」が、演劇と共に大ヒットを記録。さらに作詞家の野口雨情(三浦貴大)と組んだ「船頭小唄」や西條八十(渡辺大)と組んだ「東京音頭」など名曲を次々と流行らせ、作曲家の地位を確立します。日本の文化に大きな足跡を残した文化人たちの交流が活写され興味をひかれます。

また、晋平をめぐる女性たち——母のぞう(土屋貴子)、妻の敏子(志田未来)、後妻となった元芸者の喜代治(中越典子)らの男性が優位だった時代を生きる苦境や心情にも寄り添い、明かされる晋平作曲の「 Gondola の唄」や「シャボン玉」などの誕生秘話が歌への理解を深め、さらなる感銘を呼び起こします。

雨情や八十らと創作に没頭する晋平でしたが、日中戦争が激化すると治安維持法で表現の規制は強化され、芸術家も軍への協力を迫られます。『千羽づる』『月光の夏』『ひめゆりの塔』など、戦争の悲惨さを描き続けてきた神山監督ならではの迫真性で、音楽とは相いれない自由を抑圧する軍国主義と対峙する芸術家たちの葛藤も描かれています。本作は大衆と共にある芸術の真価に触れ、心が弾む見応えある優れた音楽映画であると同時に、戦後80年に相応しい反戦映画でもあります。(上映劇場、ホール上映、配信などの情報はホームページでご確認ください)

製作・「シンペイ」製作委員会 配給・シネメディア 2024年/日本/カラー/127分 中村橋之助 志田未来/渡辺大 染谷俊之 三浦貴大 中越典子 吉本美憂 高橋由美子/酒井美紀 真由子 土屋貴子 辰巳琢郎 尾美としのり 川崎麻世/林与一/緒形直人 ナレーション・岸本加世子 監督・神山征二郎 企画・プロデュース・新田博邦 脚本・加藤正人、神山征二郎 音楽・久米大作 撮影・編集・小美野昌史

『レッド・ページ 今に続く 負の遺産』

平沢清一

最近プロデューズしたドキュメンタリー映画『レッド・ページ 今に続く 負の遺産』（鶴見昌彦監督）が完成したこともあり、前号の堀内正美さんによる「私の父と墓碑の会」を感慨深く拝読しました。堀内さんが生まれた3か月後に、父である堀内甲監督がレッド・ページで東宝を解雇されたとのこと。その後、甲さんは独立プロに活路を見出していきますが、乳飲み子を抱えた家族の生計の術を奪う、あまりに冷酷な仕打ちがレッド・ページの非道さを如実に物語っています。

1949年から始まるGHQと政府によるレッド・ページで、約4万人もが不当に職や地位を奪われました。映画は戦後史を辿りながら、数少ない存命の当事者の証言を集め、被害の過酷な実態や再軍備で民主主義が破壊されていく冷戦下の政治的な背景を解明し、人権侵害の責任の所在を研究者などの丹念な取材で追及していきます。政府はGHQの命令には逆らえなかったと責任逃れしますが、公文書など資料を紐解き、その欺瞞を暴き出します。排斥と差別の筆舌に尽くしがたい苦境を経験しながらも、前向きに生きる被害者の明るさに勇気づけられます。

昨年、米アカデミー賞を総なめした『オッペンハイマー』が大きな反響を呼びました。水爆に反対したことで「原爆の父」と呼ばれた著名な科学者が、「赤狩り」で公職を追われた史実が描かれています。他にも『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』『グッドナイト&グッドラック』と、最近日本でアメリカの赤狩りを主題とした映画の再上映が続いています。また1月公開された『アプレンティス ドナルド・トランプの創り方』は、トラン

プ大統領の独断的手法を指南したのが、悪名高い弁護士ロイ・コーンだったと暴露しています。このコーンこそ極右議員マッカーシーの右腕として、赤狩りを扇動した人物でした。米映画人はこれまでも『追憶』『ウディ・アレンのザ・フロント』『真実の瞬間』『マジエスティック』など、スター俳優も出演し、負の歴史である赤狩りに向き合い続けています。

ところが日本映画では同時代に猛威を振るった人権侵害のレッド・ページについて、ほとんど描かれることはありませんでした。本格的にレッド・ページを主題にしたという意味で本作は画期的ではないかと思っています。レッド・ページの理不尽な実態を伝え、二度と悲劇が繰り返されないように映像で記憶を継承し、映画が犠牲者救済と思想差別を根絶する一助になればと切望しています。〈問い合わせは「レッド・ページ反対全国連絡センター」までTEL/FAX 03(3576)3755〉

ドキュメンタリー映画
レッド・ページ
今に続く 負の遺産



院内集会
レッド・ページ被害者の
人権回復と人間の尊厳が
守れる政治を目指す
2019・5・28 国会議事堂
DVD発売中!

政府は、名誉の回復と賠償を！
日本共産党員やその支持者であることを理由にレッテルを貼られ、職場を追われたのがレッド・ページ。戦後の日本で、労働運動が弾圧された公務や民間の職場から無差別的に不当な解雇や免職処分を受けた事件です。ページされ75年を迎える今日、日弁連などの救済勧告に背を向け続ける政府に、名誉回復と賠償を求めて運動を進めています。

運動を広めるために DVD 普及にご協力下さい！
特典 10枚ご購入で1枚サービスいたします◎
DVD/75分 価格 1,500円 個人・団体内販費用

申込み先
レッド・ページ反対全国連絡センター Tel/Fax:03-3576-3755 E-mail:redpagezenkoku@gmail.com
郵便振替:00130-4-263391 加入者:レッド・ページ反対全国連絡センター
通信費:「DVD代金」とご記入下さい

証言者
大橋 豊 (滋賀省でページ) 権田圭助 (電産でページ) 秋山富美子 (電産でページ)
小林光子 (農林省でページ) 堀山正治 (電産でページ) 益子良一 (被害者家族・父鶴は電産でページ) 市田忠義(日本共産党中央委員会副委員長) 伊藤正之(福島大学名誉教授) 宇都宮健児(弁護士) 大住広之(元毎日新聞記者) 萩野富士夫(小樽商科大学名誉教授)
黒川伊織(神戸大学大学院研究者) 松山秀樹(弁護士) 明神 勲(北海道教育大学名誉教授)
三宅明正(千葉大学名誉教授)

©レッド・ページ反対全国連絡センター

○松本 平 忘れてはならない戦後80年

今年、戦後80年の節目という新聞・雑誌の記事を見かけます。しかし、日々起きている戦争の映像を観る度に、世界も、日本も、この80年の歴史をどう振り返り、どう総括したのか疑うことばかりです。敗戦直後「二度と戦争をしない」と誓ったはず。この数十年、憲法を無視する動きもあとを絶たない状況です。いつのまにか自衛隊も旧日本軍のようになってきました。「日本をとりまく状況変化」等という言葉さえ使えばどうにでも出来ると思っているのでしょうか。防衛予算ばかり増額し、軍備拡張に突き進んでいます。

「映画人の墓碑の会」の会員には、戦中戦後、様々な体験を被られた方々やその家族がたくさんいます。訃報と会員紹介の中でそのことを毎回感じています。東京大空襲に出合った方、また、旧満州で敗戦に出合い、言語を絶する体験された方もいます。

今年も全合葬者・合同追悼会を前に、会報「七ふく」107号を皆様にお届けすることが出来ました。4月29日が、戦後80年の記念すべき追悼会となることを願っています。

○高間賢治 『りりイ…私は泣いています』というドキュメンタリー映画を公開してから1年ほど経ちますが、りりイさんが所属していたアルファエージェンシーの万代博実社長の訃報が届きました。万代さんのお陰で豊川悦司、高橋和也、根岸季衣、JUON、研ナオコ、山崎ハコさんのインタビューを撮影することができ、岩井俊二監督の『リップヴァンウィンクルの花嫁』のクリップを無料使用することができました。もっともっとお礼をしなけ

ればと思っていた矢先の訃報でした。この「七ふく」の編集作業をしていると、当然のことながら訃報だらけ。山田火砂子監督も同年代の友人も次々と亡くなっている。一昨年暮れには自分も鳥山明さん、下條アトムさんの死因と同じ硬膜下血腫だった。本当に、死はすぐ隣にいるお友達だと思ってしまう。死を考えると生を考えること。精一杯、できれば元気で生きよう。ということで浜野佐知監督『金子文子 何が私をそうさせたか』の絶賛ポスプロ中。

○堀田敏子 新年早々に行なわれた「隅田川七福神巡り」に参加した翌日に、なんだか私の体調がおかしい。コロナ禍の5年余りには、コロナにも感染せず風邪もひかず気力も充実した日々を過ごしてきたのに：翌日、近くの診療所に行くと、インフルエンザに感染していて、あれよあれよと言う間に39度の高熱が続き、結局一ヶ月近くかかって完治した。やっと日常生活に戻ったところ、編集委員の高間さんから「七ふく」の107号の一篇が届いた！今回は編集委員としては、落ちこぼれてしまいました。嗚呼！

事務局よりお願い

桜の花も毎年早く咲き始めています。皆様如何お過ごしでしょうか。今年も、全合葬者・合同追悼会が近づいています。

墓碑の会事務局では、合同追悼会への参加人数をできるだけ早く確認したいと思っております。

つきましては当日参加されます全員の名札を作成いたしますので、同封のハガキに参加者全員の名前を書いていただき、4月12日まで必ず投函して頂きますようお願い致します。